言語文化学科 国語国文学コース

国語国文学コースってどんなとこ？

国語国文学コースでは、あらゆる時代の日本の言語と文学作品を研究対象としています。授業ではその中からいくつかの具体的なテーマが取り上げられますが、そこで学ぶべきは、その個別の対象に関する「知識」（ある時代の文学の内容や、言葉の使い方など）よりはむしろ、対象を実証的に分析する「方法」であると言えます。高校までと違い、必ずしも正答が一つであるとは限らない未解決の問題に、学生自らが挑むことになります。授業の中で求められるのは、例えて言うなら天才探偵の直観的名推理ではなく、愚直な刑事の地道な証拠集めです。根気のいる作業ですが、そこで身につけた、問題を発見・解決するための堅実な態度は、一生を通じて様々な場面で役立てることができるのです。

久堀先生の研究について

私の専門は江戸時代の文学・演劇で、その中でも特に人形浄瑠璃について研究しています。本格的なドラマを備えた大人のための人形劇は世界でもあまり例がありませんが、日本ではそのような作品として、江戸時代に人形浄瑠璃の新作がたくさん生み出され（通して上演すると8時間ほどかかるというその長さでも異例でしょう）、一時期その人気は歌舞伎を上回るほどでした。人形浄瑠璃という芸能、そしてその個々の作品は、一体どのような時代背景のもとに成立したのか、そして今日の文楽に至るまでどのように伝承されてきたのか、主にそのようなことを研究しています。また、18世紀以降、大阪がいわば人形浄瑠璃の本拠地となりましたが、大阪で初演された作品は、淡路島にあったプロの人形浄瑠璃劇団が全国を巡業することによって地方にまで伝えられました。人形浄瑠璃の歴史の中で大きな役割を果たしたこの淡路の人形座の活動についても研究を進めています。

准教授
久堀（くぼり） 裕朗（ひろあき） 先生

おすすめの本

三浦しをん
『あやつられ文楽鑑賞』
（双葉文庫）

人気作家が文楽にはまっていく過程を記した本で、文楽ファンならずとも楽しめる内容になっています。

元上さんの学びについて

3回生
元上（もとがみ） 裕貴（ひろき） さん

――コースに入ったきっかけ

小さい頃から、日常生活にあふれている知らない日本語に出会うのが好きでした。そんな中、高校生のときに朝ドラの「ごちそうさん」を見て、登場人物が話していた船場ことばに惹かれ、大学で勉強したいと思うようになりました。

――コースに入ってからの気づき

コースに入るまでは、高校古典の延長線のような授業を想像していました。しかし実際は、『日本国語大辞典』や注釈書はおろか、ときには先生の仰ることまでも疑ってかかりながら、対象とする作品に注釈をつけるような授業です。そのためには、ジャンルを問わず幅広く多くの文献を読まなくてはなりません。たとえば近代の文章を読むときは、本だけでなく新聞も参考の対象です。だから高校とは全く構え方が違いますね。また、日常生活でもわからないことがあれば粘り強く調べるようになりました。この姿勢は、コースでの学びにより培われたものだと思います。

おすすめの授業

国語学方法論

「簡単だ」と「易しい」や「性質」と「性格」など、ほとんど同じ意味を持つ言葉の細かな違いを考える授業です。その際、その言葉が使われている用例を探し出し、どのような文脈で使用されているのかを見極めます。言葉の感覚は人それぞれなので、意見が大きく分かれることもあり、言葉の奥深さを実感できます。

卒業論文 タイトル紹介

○東野圭吾作品における悪女について
○『今昔物語集』選者の「転生」へのこだわりについて
○比喩表現における直喩と隠喩の性質と働きについて

久堀先生にとっての「芸術」

浄瑠璃）や落語は果たして「芸術」なのか「娯楽」なのか、という問いが立てられることがあります。「芸術」「娯楽」いずれも間違いではありませんが、私はそのように二者択一で捉えるより、むしろ文楽や落語が芸術性と娯楽性を兼ね備えている点に注目したいと思います。江戸時代の、ある浄瑠璃の口伝書に「浄瑠璃嫌いな人、この本を見て浄瑠璃ごときに口伝書とはと笑ってはいけない。むろん浄瑠璃がなくても世界の嘆きにもならないし、何ということもない。しかし語れるなら語ってみよ」と書かれています。単なる娯楽に過ぎない浄瑠璃にも、演者の側には厳しい芸の修業があり、それゆえの自負があったことが読み取れます。文楽も落語も、そうした演者の芸の追究の末に今日まで伝承されたものであり、その結果、芸術性をも獲得するに至ったのです。こうして現代に伝えられた文楽や落語の芸を、私は「なくなると世界の嘆きになるもの」と捉えています。

法文学部（当時）の卒業生である開高健は、芥川賞や日本文学大賞などを受賞している日本を代表する小説家です。

言語文化学科 中国語中国文学コース

中国語中国文学コースってどんなとこ？

中国と聞いてまず何を思い浮かべますか。日本の26倍の土地に13億の人々が暮らす国。大多数は漢民族ですが、50を超える少数民族との共生という難しい問題に古来より直面してきた国でもあります。また漢民族の文化といえば、まず挙げられるのが漢字。朝鮮、ベトナム、日本は東アジア漢字文化圏に位置します。平仮名・片仮名は漢字の伝来の後に創出されました。漢字を通じて儒教、仏教、詩、文などが伝わりました。江戸時代まで漢詩文の読解力が知識人の証であったことは忘れられがちです。中国は近現代の時代に入ると西洋の知識文化と遭遇して急激な変化を遂げました。このコースには古代から現代まで、中国を理解するための扉が開かれています。

岩本先生の研究について

私は、中国語の変遷について研究しています。漢民族が暮らす地域に限っても実に広大で方言の違いは想像以上に大きいのですが、方言は本来、各地域に根ざした話し言葉の世界で文字表記がありません。一方、文字を持った一握りの人々に共有される書き言葉の世界は話し言葉とは隔絶し、「話す通りに書く」という「言文一致」とはなりません。また周辺地域に漢民族以外の多くの民族がいて、その交流のために漢民族の言語と異民族言語とを対照する語彙集や会話集が編まれました。これらは当時の話し言葉の実態を反映する貴重な資料で、異民族との接触がなければ、自らの話し言葉を記述する機会は非常に少なかったともいえます。現代の中国語をみても統一性と多様性の両面が共存しており興味をそそられます。

教授
岩本（いわもと） 真理（まり） 先生

おすすめの映画

『山の郵便配達』
（霍建起）

中国の少数民族や都会と離れた大自然、文化を感じられる一作。人とのつながりが静かな感動を呼ぶ。

坂本さんの学びについて

3回生
坂本（さかもと） 陸（りく） さん

――コースに入ったきっかけ

私は、もともと古典に興味があり国語国文学コースを志望していました。しかし、古典のためと履修していた新修外国語の中国語を学習していくうちに、昔の漢字が今の中国語に活きていることにおもしろさを感じ、このコースに入りました。

――コースに入ってからの気づき

一番大きな気づきは、このコースは決して言語に特化したコースではなく、中国語という言葉を媒体として映画やオノマトペなど中国文化を幅広く学ぶことのできるコースだったことです。さらに、このコースは人数がとても少ないため、ほぼ個別指導できめ細やかに、そしてみんな仲良く学習できる環境であることもわかりました。また、方言の強い中国語はまだ難しいものの、電車などで流れる中国語のアナウンスは聞き取れるようになりました。また、中国人に道を訊かれたときに、中国語で案内できたのもこのコースでの学びの成果だと思います。

おすすめの授業

中国文学演習

中国の文学作品を精読する授業です。ただ中国語から日本語に直訳するだけでなく、読者という第三者の存在を意識しながら「翻訳」する練習をします。中国語特有の表現を、読者に伝わるようにどう日本語で訳すか、などの翻訳の難しさを感じます。自分の中国語のレベルが上がっていくのをはっきりと感じられる授業です。

岩本先生にとっての「芸術」

一つの分野に絞るのは大変苦しい。水墨画の世界があるかと思えば、敦煌の大壁画があり、なめらかな肌あいの陶磁器、趣向を凝らした庭園、風雪に耐えた石仏、琴や笛による演奏、舞台芸術である京劇など、種類は実に豊富。こうして挙げると、「静」と「動」とに分かれており、異なる特徴をもつ芸術が各自の居場所を保っていることに気づきます。さて特に紹介したいのは「書道」です。筆、墨、硯、紙という道具を産み出して人々が伝えてきたもの。数百年前に書かれた作品であっても、その前に立つと当時の書き手の姿が浮かびます。呼吸を整え筆に墨を含ませて紙に向かい一気に腕を動かす。筆は生き物のように姿を変えて紙に食い込み、あるいは速やかに移動する。そこに立ち現れるのは生命力に満ちた文字の姿。「龍飛鳳舞」という比喩がぴったりの「動」の世界が出現します。また石に字を彫り付ける「篆刻（てんこく）」も楽しいのですが、残念ながら字数が尽きました。

卒業論文 タイトル紹介

○中国語翻訳された漫画の中のオノマトペについて
○ライトノベルにおける笑顔の表現の中国語翻訳について
○中国・内モンゴル自治区におけるモンゴル族とそのアイデンティティ

大阪市立大学杉本キャンパスは、弥生時代の山之内遺跡の上に建っていて、ここから土器も出土しています。